

令和6年度「人権教育研究指定校事業」指定校事業報告書

委託先（大阪府）

1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ	児童生徒の意見表明権を重視し、主体的に自他の人権を守ろうとする行動力を育む効果的な指導方法
----------	---

○調査研究のテーマを設定した目的

令和4年度「児童生徒の問題行動等に関する調査」では、大阪府内の暴力行為発生件数が前年度比小学校約35%、中学校約29%と大幅な増加傾向にあること、また、不登校児童生徒数は、府内小中学校併せて約2万人と厳しい状況であった。

この背景には、この間のコロナ禍による人と人とのつながりが分断される期間が長く続いたことが要因の一つとして挙げられる。これまで以上に子どもたちには、自分の感情を整理した上で気持ちを言葉で表現し、相手に正しく伝わるように話す力を育むことが大切であると考え。そのためにまず、教職員をはじめとする大人が、しっかりと子どもたちに向き合い、丁寧に気持ちを聞くことが必要である。

昨年4月に施行された「こども基本法」に、子どもの意見表明権が示されていることから、改めて自分の気持ちや考えを発することを子どもの重要な権利として認識し、子どもの声から始め、主体的に自他の人権を守ろうとする行動力を育むことができる人権教育を推進していきたい。

また、法務省の「部落差別の実態に係る調査結果（令和2年6月）」において、インターネット（以下、「ネット」）上の差別が増加傾向にあることが示されているが、大阪府内小中学校においても依然として子どもたちがSNS等で差別に出会うことが増加していることや、SNS上での人権侵害事象が生起している。子どもたちがネット上を含め、社会の中にある偏見や差別に出会ったときに、それが偏見・差別であることを見抜き、根拠を持って相手に適切に間違いを指摘するなど、自他の人権を守るための行動力を育む取組みを、引き続き進めていく必要がある。

その際、情報モラル教育や情報技術に関する知的理解学習だけでなく、普段から自他の心と体を大切にし、ともに人権を尊重し合う人間関係を構築する等、価値・共感的な学習を設定することが不可欠であると考え。それらを基盤として取り組む研究指定校の研究成果を取り入れ、府が作成する「ネット上の偏見・差別問題について考える系統的な学習体系」の完成につなげたい。

これらの目的の達成に向けた効果的な指導方法を調査研究するため上記のテーマを掲げた。指定を予定する研究指定校の研究成果を府内全体に普及することで、府内すべての子どもたちが、自分の気持ちや意見を大切にされたという実感を積み重ね、自他の人

権を守るために行動できるようにしていきたい。

○調査研究の概要

- ①現代的な人権課題である SNS などネット上の差別や人権侵害をなくしていく力をつける効果的な指導方法の研究
- ②すべての子どもが自分の意見を表明する権利を保障され、自他の人権を認め合うとともに、具体的に人権を守ろうとする行動力を育むための効果的な指導方法の研究

2. 基本情報

研究指定校の概要

○学校名

東大阪市立長瀬北小学校

○これまでの研究指定等の状況

○学級数

9学級

○児童生徒数

181人

○URL

<http://school.higashiosaka-osk.ed.jp/nagasekita-el>

○指定理由

東大阪市には、外国籍及び外国にルーツのある子どもが多い地域や児童養護施設のある校区、障害者支援施設のある校区などがある。その校区内に位置する学校においては、校区の特色を生かした課題を人権教育の核とし、子どもたちが、身近にある課題を自分事として捉え、考えることで行動につなげることができるような取組みを実践し、そこを切り口に様々な人権課題についても自分に引き寄せて考えることにつなげようとしている。

長瀬北小学校は、経済的・家庭的に厳しい状況におかれている子どもが多数在籍しており、家庭環境の厳しさから、基本的な生活・学習習慣が十分身についておらず、そのことが欠席や遅刻、体調不良、学ぶ意欲が低下する大きな要因となっている。

すべての教職員が連携してこのような厳しい背景をもつ子どもたちに寄り添い、生活背景を知るとともに安心して学ぶことができる環境をつくるため、家庭との連携を密にして、ともに課題の解決に取り組んでいる。「根っこ（くらし）でつながる集団づくり」を基盤として、「自らの進路を切り拓くことができる学力の保障」をめざし、基礎学力の定着を図るとともに、子どもたちの「思考力・表現力・学びに向かう力」の育成を大切にしながら集団づくり・授業づくりを全教職員で実践してきている。そのような実践をさらに深めた研究を行い、市内全域に普及することは、市内の人権教育の発展に大きな効果が見込まれ、さらに府域への普及にも貢献できることから研究指定校に指定した。

3. 取り組んだ人権課題について

取り組んだ人権課題（該当するものに○印。複数選択可。うち、最も主要な人権課題1つに◎をつけること。）※人権教育研究推進事業公募要領（別紙）「2. 事業の内容」を必ず確認すること。

①子供	○
②女性	○
③高齢者	
④障害者	○
⑤ <u>同和問題</u>	◎
⑥ <u>アイヌの人々</u>	○
⑦ <u>外国人</u>	○
⑧- 1 HIV 感染者等	
⑧- 2 <u>ハンセン病患者等</u>	
⑨刑を終えて出所した人	
⑩犯罪被害者等	
⑪インターネットによる人権侵害	○
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬性的指向、性自認	○
⑭その他（ ）	

4. 調査研究の内容等

○調査研究の内容

長瀬北小学校では、長年にわたり、人権教育・同和教育を推進してきた。ここ2年間で、11人の教職員の入れ替わりがあり、教職員の育成が急務となっている。とくに、人権三法の目的を理解するとともに、部落差別を解消するための教育を推進していく人材の育成がこの先10年の学校づくりには、欠かせないと考えている。

1) 6年間の系統的な人権教育カリキュラムの再構築と実践

子どもたちの発達段階や社会的マイノリティの立場性の自覚等、子どもの実態から見えてくる「つけたい力」を共有し、社会の状況をふまえた系統的な人権教育カリキュラムをつくり直す必要がある。

2) すべての子どもたちが思考し、発信する力をつける

ペア・班学習、人間関係づくりなどを通して、友だちへの声かけや関わり方を学ぶ機会を日常的に設定する。学校全体での授業づくり研究を通して、班の子どもたちが互いに関わり、ICTなども活用しながらすべての子どもが自分の考えを持ち、発信できる学習活動の基盤として「長瀬北小：学びの安心のやくそく」をつくりあげる。

3) 地域・部落問題学習の新たな取組みの創造

これまで、自らの生き方をつくる子どもの育成のために、地域の方や施設とつながり、ききとり学習などを通して、地域の思いや願いから取組みを進めてきた。また、地域の中で生き抜いてきた人の物語である絵本「しきじのみっちゃん」などを通して、地域の歴史や地域の方の思いについて、深く広く学んできた。

これらの取組みの中で行ってきた学習に加え、地域の水平社創立100周年を機にあらたな地域教材を作成していきたい。そこから、人間としての生き方を学び、自分たちの立場性を自覚し、互いの人権を守る行動ができることをめざす取組みを創造していきたい。

上記の研究により、すべての子どもたちがなかまとともに確かな学力をつけ、自らの生き方をつくりながら、社会を変革していく行動力をつけていくことができると考えている。

【大阪府として】

これらの取組みを推進するため、専門家を交えた協議会を開催する。また、府教育庁より大学教授等学識経験者を派遣するとともに、府教育庁指導主事により市教育委員会及び学校をきめ細かに訪問し、取組みの進捗を把握する。研究を進める上で生じる課題に対して指導助言を行うことで、研究指定校及び市町村教育委員会への支援を行う。

○実施方法

1) 6年間の系統的な人権教育カリキュラムの再構築と実践

2) すべての子どもたちが思考し、発信する力をつける

3) 地域・部落問題学習の新たな取組みの創造

【各学年の主な実践】

・「パオ（障害者作業所）との交流」1年

地域の障害者作業所に行き、そこで働いている人たちと一緒に紙すき体験を行った
り、ポッチャを行ったりして、互いのことを知り合う機会とした。学級では、そこで
働く保護者がいる子どもが知っていることを語り、障害のある人を身近に感じられ
る取組みを実施した。

・「ふたりのお母さん」 2年

絵本「ふたりのお母さん」を読み、子どもたちが感じ取ったことを書きだし、共有し
た。さまざまなおうちの形があることに触れることを通して性の多様性に気づいて
いった。すべての子どもたちが自分の生い立ちや家族を肯定できるよう取組みを進
めた。

・「半日村」 3年

国語科教科書教材「モチモチの木」につなげて、絵本「半日村」の読み取り学習を進
めた。生まれた場所が悪かったとあきらめるおとなに対して、ひたむきに行動を起
こす一平の姿から行動を起こすことのたいせつさを子どもたちは感じ取った。

・「ごんぎつね」 4年

国語科教科書教材「ごんぎつね」を通して、みえる行動だけでなく、みえない思いや
考えがどんなものなのか考えることのたいせつさについて考えた。また、友だちと
の関わり方について自分と重ねて考えふりかえることができた。

・「しごとの学習」 5年

子どもたち一人ひとりが自分の保護者の仕事に関することを聞き取り、保護者の思
いや経験を知り、今の自分について考え、自分の行動をみつめなおした。就労のため
の募集チラシから性差による賃金差を考え、社会の不合理に気づいた。

・「社会に残る課題と向き合って」 6年

自分が学びたい個別的な人権課題を子どもたちが選び、法務局の動画を視聴し、調
べ、聞き取り学習を実施した。学んだことをグループごとにまとめ、社会に残る課題
を解決するために自分にできることについて考えたことを交流し、学びを深めた。

○検証・評価・改善・普及

アンケートの実施、分析から取組みの効果をみとる。

アンケート項目 (対象)	R 3	R 4	R 5	R 6	目標値
自分にはよいところがある (全学年)	62.8%	69.8%	71.3%	81.4%	80.0%
失敗しても、友だちに笑われたり、からかわれたりするこ とはない (全学年)	68.0%	73.4%	79.5%	65.9%	85.0%
自分の思いや考えを友だちに伝えています (全学年)	80.2%	78.6%	78.5%	81.0%	85.0%
地域や社会をよりよくするために何をすべきか考えるこ とがありますか (4・5・6年)	80.4%	81.6%	68.5%	69.2%	85.0%

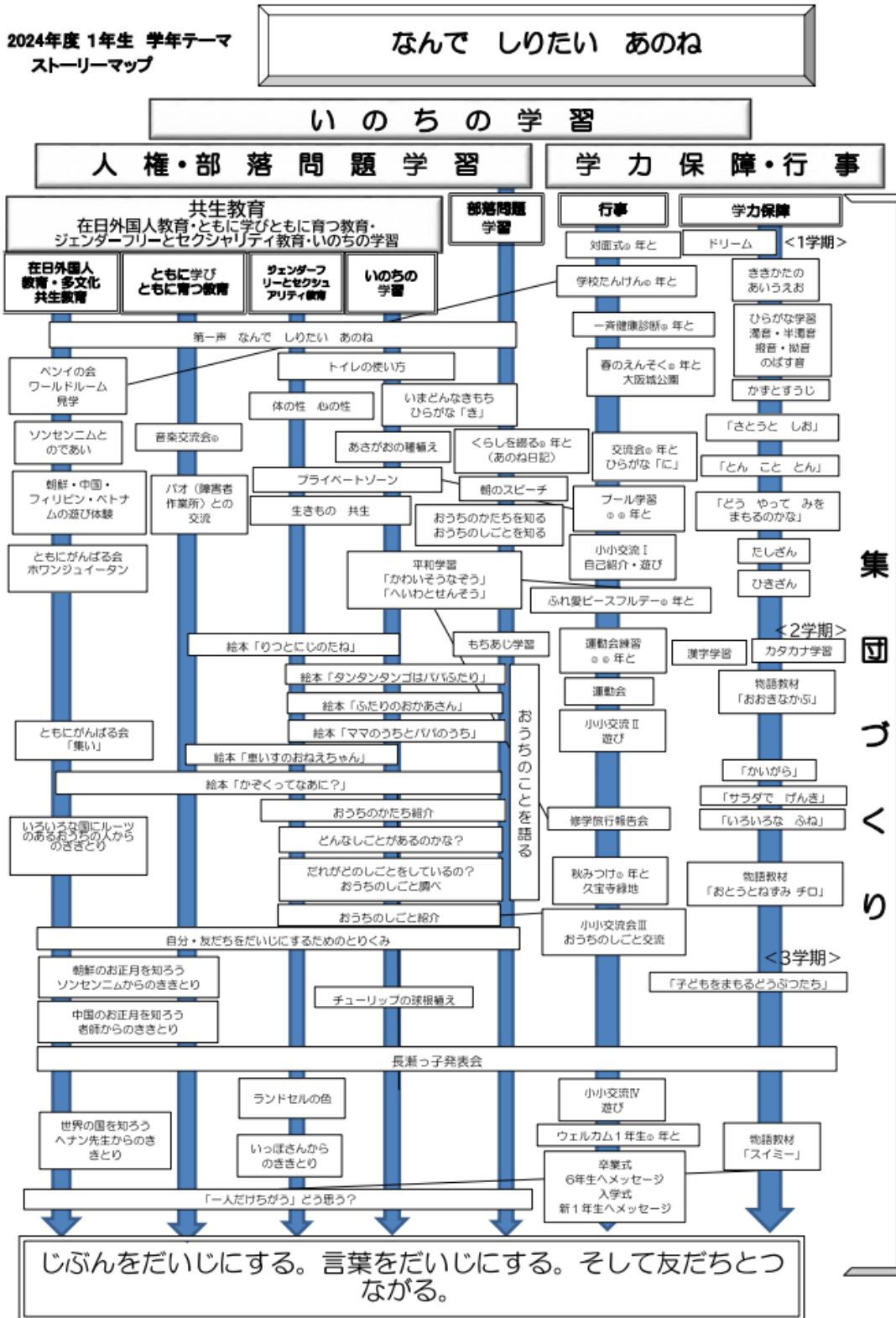
・全学年で年3回 (7月、11月、2月) アンケートを実施した。

・個別的な人権課題について学習を進めている高学年については、社会にある課題を
認識し、自分や友だちや家族の心の痛みについて向き合い、自分に何ができるのか

について考えた。アンケートを実施した11月段階では、どのような行動が社会をよくすることにつながるのか実感をもたせるまでには至らなかった。11月以降の継続した取組みの中で、校内の学習発表会では、どう生きていくのか、社会をどうよくしていくのか地域・保護者の前で、多くの子どもたちが発信する場を設定し、更なる育成を図った。

- ・ペアやグループ学習を取り入れて、学習を進めている。81%の子どもが安心して学級の中で自分の思いを伝えることができているが、「失敗しても、友だちに笑われたり、からかわれたりすることはない」に対して否定的回答率は30%を超えている。子どもたちは1度でもいやな経験をすると心に残っている場合が多い。子どものくらしや思いを知ること、グループのつながりを深める取組みを更に進めることによって、子どもたちの心理的安全性を高めていきたい。
- ・事業実施による成果や課題については、研究発表会の際に市内全中学校区と府内に発信した。委託期間終了後も、アンケート分析及び子どもの関係性や変容等を全教職員で共有し、取組みを継続して進めていく。

5. 人権教育にかかる年間計画



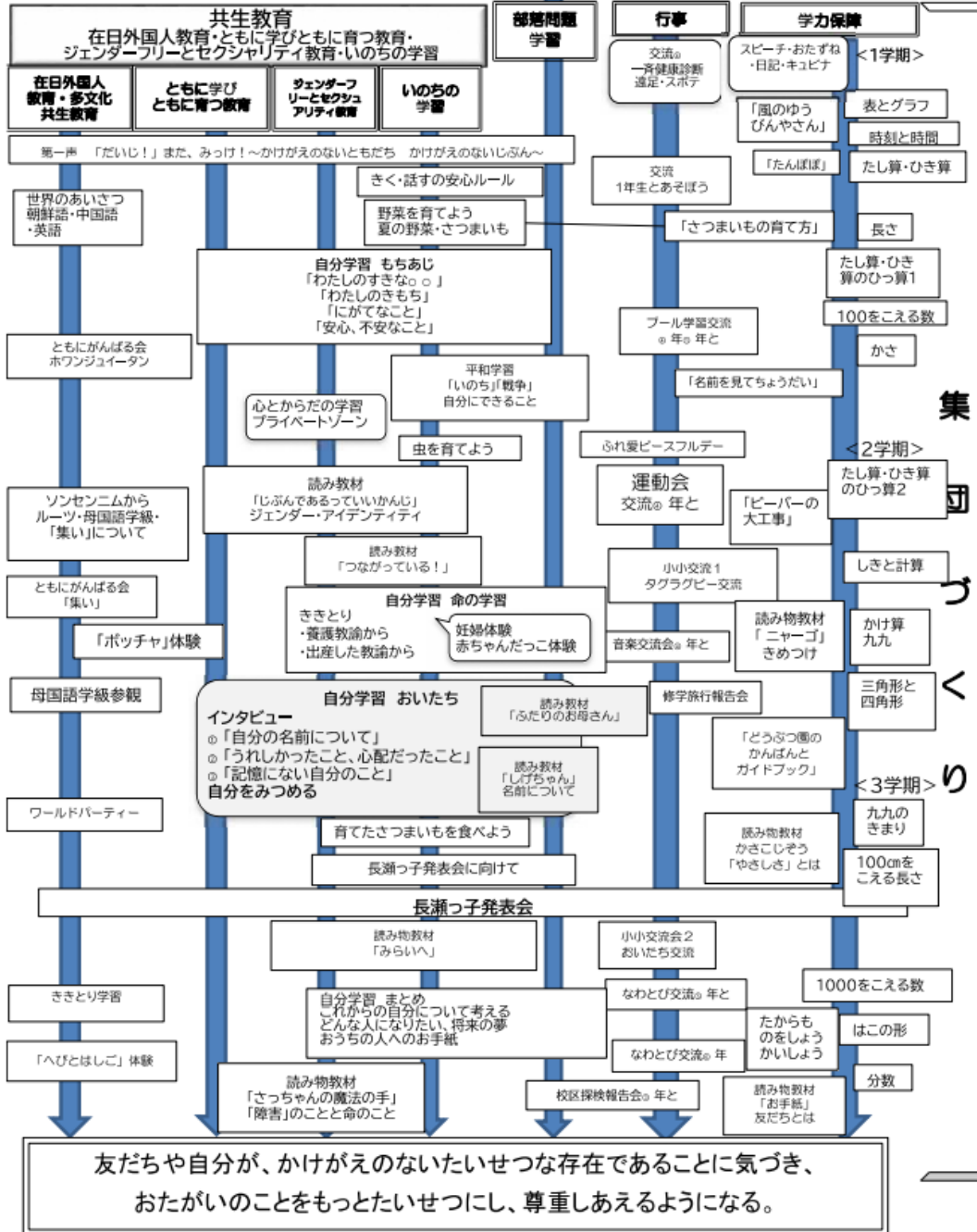
2024年度 2年生 学年テーマ
ストーリーマップ

「だいじ！」また、みっけ！
～かけがえのないともだち かけがえのないじぶん～

いのちの学習

人権・部落問題学習

学力保障・行事



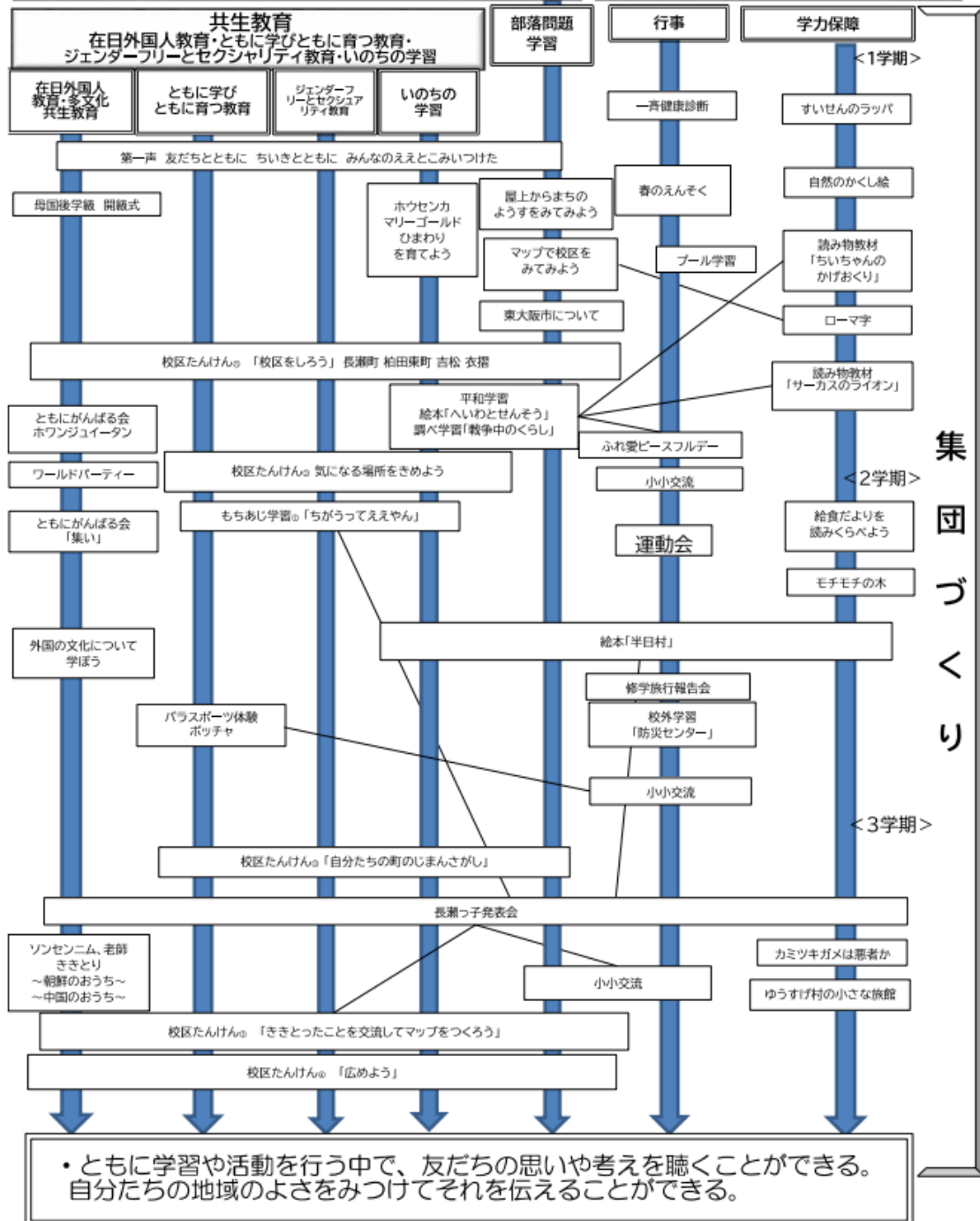
2024年度 3年生 学年テーマ
ストーリーマップ

友だちとともに ちいきとともに みんなのええとこみつけた

いのちの学習

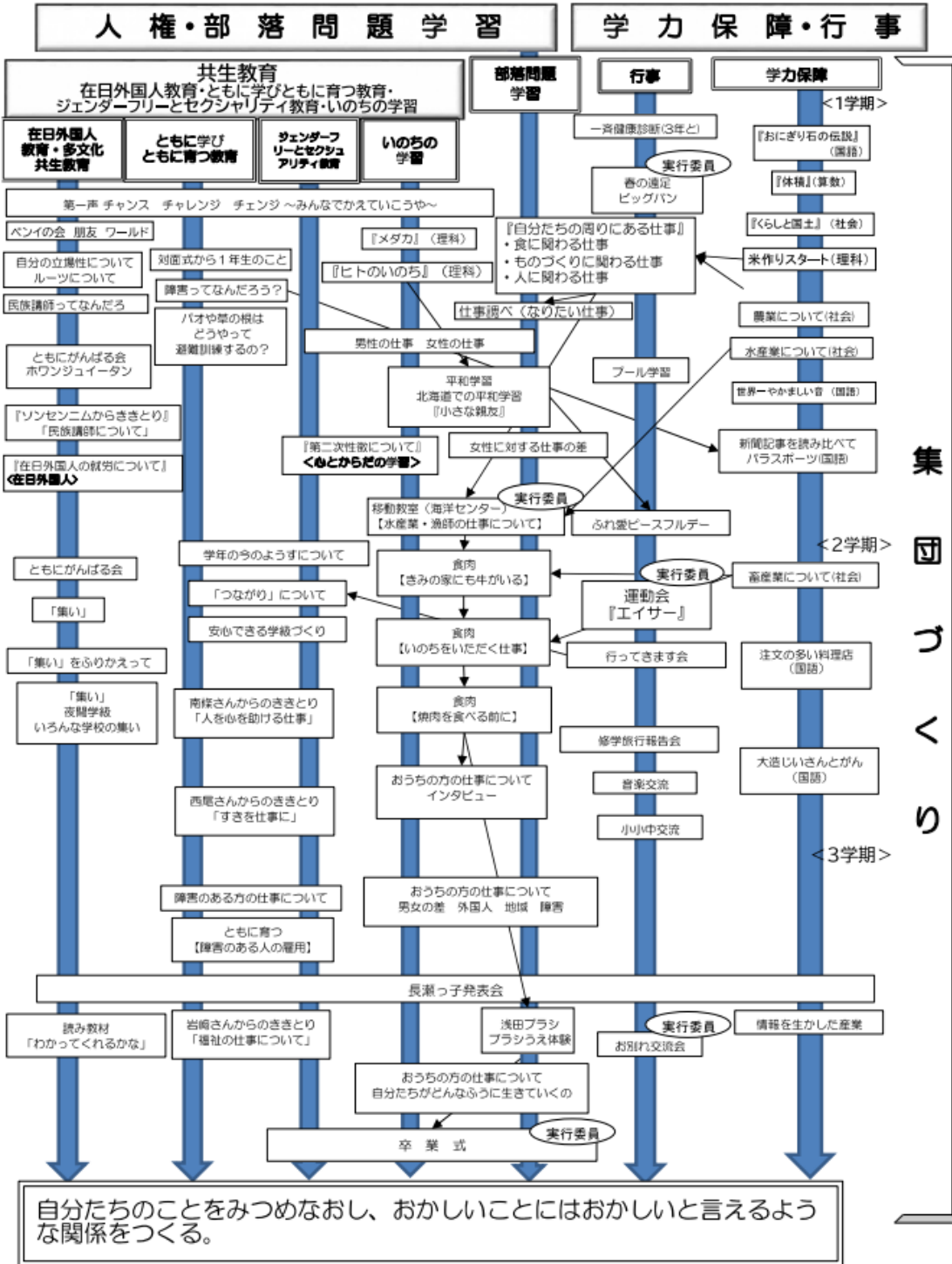
人権・部落問題学習

学力保障・行事



2024年度 5年生 学年テーマ
ストーリーマップ

チャンス チャレンジ チェンジ
～みんなでかえていこうや～

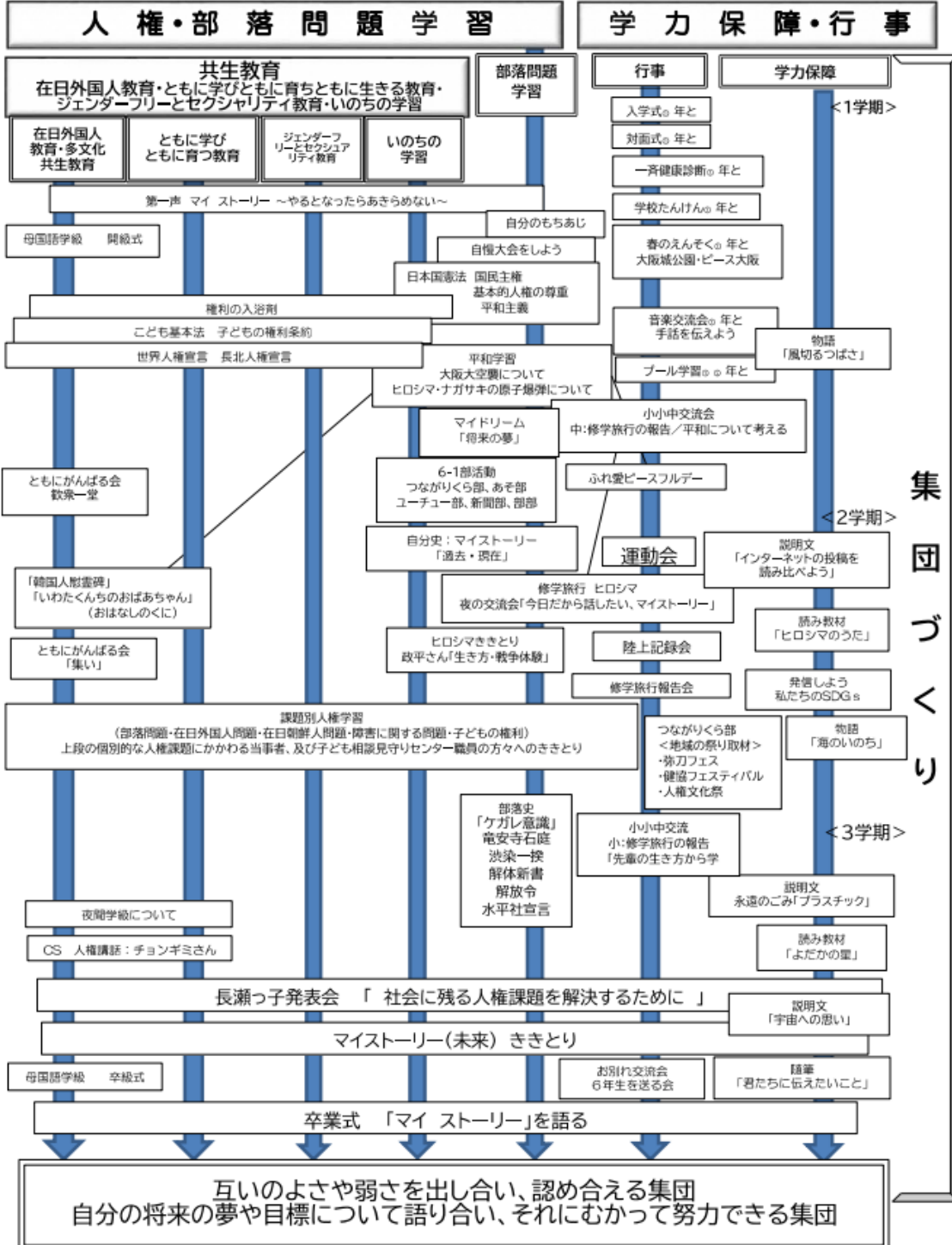


集
団
じ
く
り

2024年度 6年生 学年テーマ
ストーリーマップ

マイ ストーリー ～やるとなったら あきらめない～

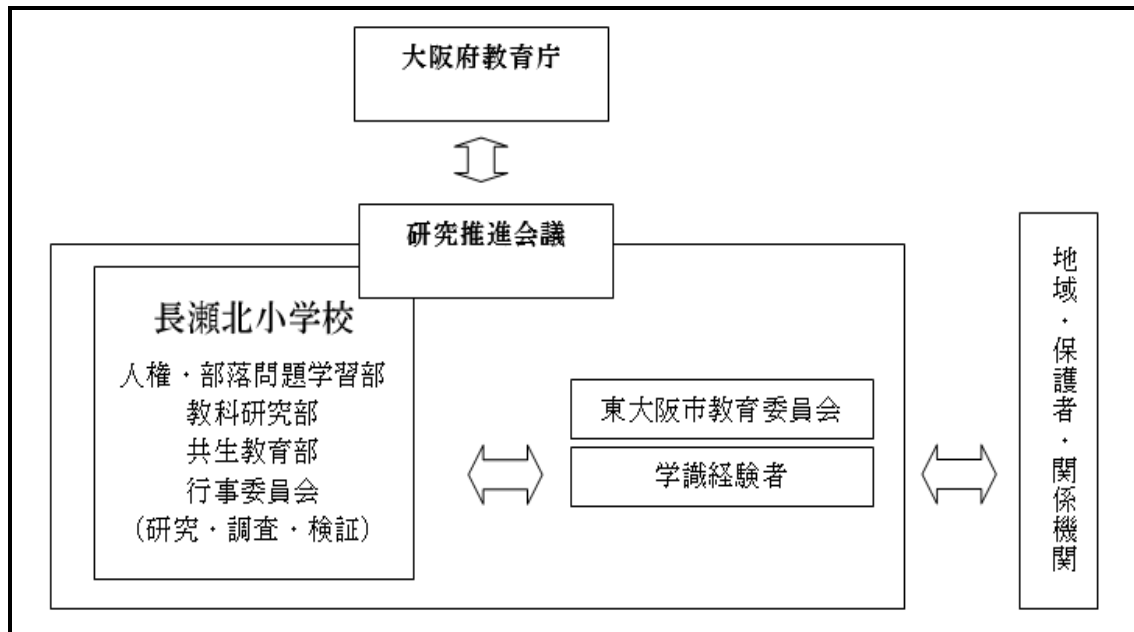
いのちの学習



集 団 づ く り

互いのよさや弱さを出し合い、認め合える集団
自分の将来の夢や目標について語り合い、それにむかって努力できる集団

6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）



○関連資料

2024年度 文部科学省指定「人権教育研究指定校事業」

研究テーマ

「子どもの意見表明権を重視し、
主体的に自他の人権を守ろうとする
行動力を育む効果的な指導方法」

東大阪市立長瀬北小学校

自らの生き方をつくる子
～豊かな人権感覚と確かな学力が育つ授業の創造～

厳しい生活背景から未来への展望をもちにくい子どもたちが、
自らの生き方をつくることができるように。

↓

- ・根っこ(くらし)でつながる集団づくりを基盤
- ・自分を見つめ、立場性を自覚
- ・他者とのちがいを受けとめ、自分の考え方・行動・生き方を
つくっていくという経験を積み重ねていく。

→ 主体的に発信したいという思いが喚起され、伝える力がつく。
思いが伝わり、広がり、なかまと行動していく力につながる。

自分の生きたいと思う生き方を、自ら切り拓いていく

1.意見表明権の保障

- ▶ 実践研究レポート検討(年3回)
- ▶ 人間関係マップづくり(年3回)

例
・A→B
AがBに思いをもっている。
・A……B
AとBのつながりは弱い関わっている。
・囲んでいる所はグループ



実践研究レポート



人間関係マップ

子どもの生活を把握→全教職員で共有
教育実践の成果と課題を検証→教育実践に活かす

1.意見表明権の保障

- あのねちょう、もちあじ学習
- 保護者からききとり(おいたち、仕事)、
- 自分史、等

・低学年では、自分について知っていくことで、自己肯定感を高めるとともに、互いの生活を知りあえるようにしている。

・高学年では、人権課題とであうことで、自分の心の痛みを認知し、立場性を自覚できるように進めている。

1.意見表明権の保障

全教科において

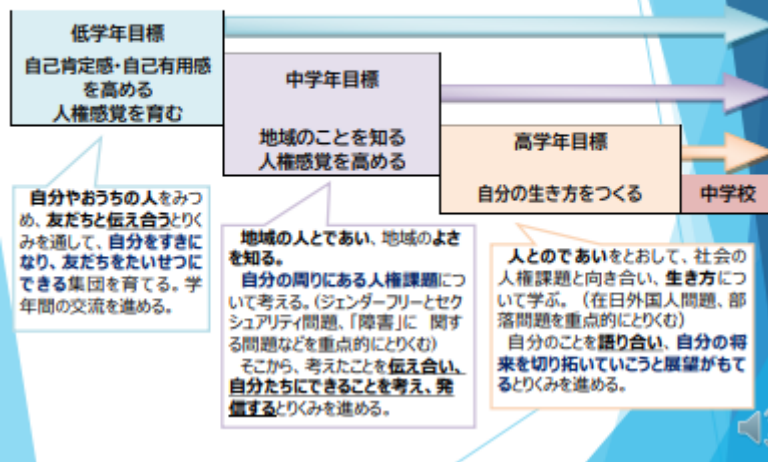
- ペア・グループ学習
- 主体的・対話的・深い学び



・低学年では、ペア学習を基本にして学びあい、密着型の授業づくりをして、心理的安全性を高め、学習の中でともに学びあっている。

・高学年では、基本的に班の形で学習し、たえず対話がうまれる授業づくりを行っている。発言の機会の保障のしかたについても徹底している。

2.自他の人権を守る行動力を育む 系統立てた人権・部落問題学習



2.自他の人権を守る行動力を育む

人権・部落問題学習 <中心とりくみ>

- 1年生 : おうちのかたち
おうちの仕事
- 2年生 : おいたちの学習
- 3年生 : 地域の人・場所・施設とのあい
- 4年生 : よりよい地域をつくる人とのあい
- 5年生 : 仕事の学習
- 6年生 : 平和学習、生き方、部落史、
個人権課題について学ぶ



2.自他の人権を守る行動力を育む

自分ごとで考える

「自分のことをみつめる」

→自分のことや生活をふりかえり、立場性を自覚し、人権課題とつなげることができるようにする。また、それを伝えあう活動を行うことで、ちがいを受けとめ、つながりをつくれるようにする。

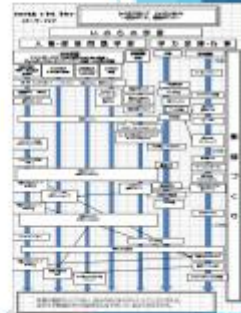
「探究的な人権・部落問題学習」

→子どもたちが主体的に、知りたい・考えたいと思う課題の設定を行うことで、学ぶ意欲を高め、自ら価値観を獲得できるようにする。

2.自他の人権を守る行動力を育む

教職員研修

- ▶「地域の歴史を学ぶ」
- ▶「ペア・グループ学習のすすめ方」
- ▶「地域のフィールドワーク」
- ▶「カリキュラム・マネジメントづくり」
（『ストーリーマップ』の見直し）



ストーリーマップ見直し研修

2.自他の人権を守る行動力を育む

教職員研修

- ▶「子どもと教職員の興味・関心からつくる授業づくり」
- ▶「『もちあじ』をたいせつにした学校づくり」
- ▶人権総合学習『つながり』授業研(各学年1回ずつ)
- ▶人権・部落問題学習部 授業デザイン検討会



中学校区合同研修「もちあじ」



人権総合学習『つながり』授業研協議会

2.自他の人権を守る行動力を育む

「探究的な人権・部落問題学習」

子どもたち自らが、知りたい・考えたい課題を見つけ、調べたり、ききとりをしたりしながら自らの考えをつきつめていく。

- ▶ 低学年では、子どもたちの意見をきき、自分の興味のあることを調べたり、きいたりできるような場を設定している。

1年:学校を支えている人、地域を支えている人

2年:生いたちの学習 おうちの人へのききとり

3年:校区たんけん 長北リサーチ



2年生「生いたちの学習」

2.自他の人権を守る行動力を育む

「探究的な人権・部落問題学習」

- ▶ 高学年では、人とのあいや地域とのあいの中から、探究したいことをみつけ、その解決方法を探っていくと取り組みを進めている。

4年:地域のよさを再確認

5年:おうちの人の仕事や生き方から学ぶ

仕事にうちこんでいる人の生き方から学ぶ

6年:人とのあいから、人権課題に

気づき、克服していく展望をもつ

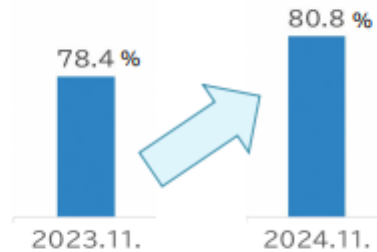
自分の生き方につなげる



6年生 人権課題別学習 保護者からききとり

3.成果

授業中自分の思いや考えを友だちに
伝えています(生活アンケートより)(全学年 肯定的回答率)

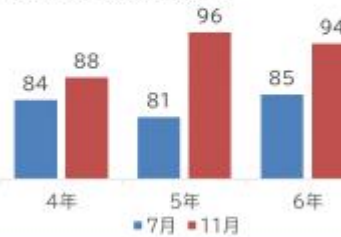


昨年度に比べ、自分の考えを伝えることができていると感じている子どもの割合が増加している。意見表明権の保障を意識したペア・グループ学習を進めてきた成果があらわれている。

3.成果

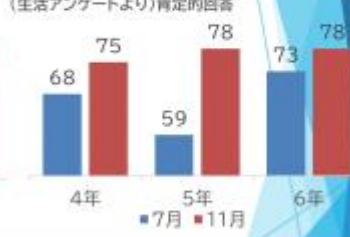
「ききとり学習をしてよかった」
(全学年 82%〔7月〕
→**92%**〔11月〕)

ききとり学習をしてよかった
(生活アンケートより)肯定的回答



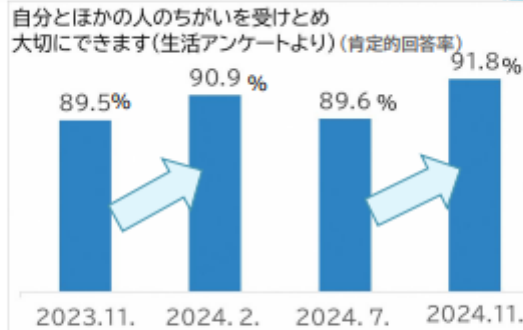
「地域や社会でおこっている
出来事に関心があります」
(全学年 71%〔7月〕
→**79%**〔11月〕)

地域や社会でおこっている出来事に関心
があります
(生活アンケートより)肯定的回答



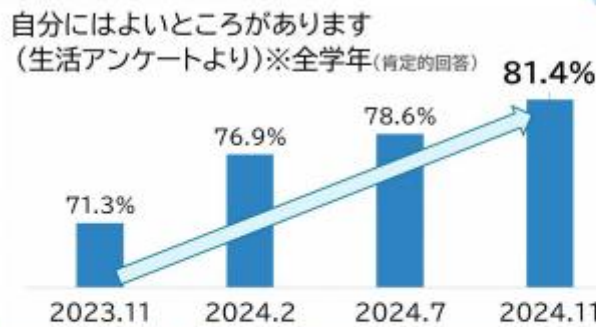
特に探究的な活動を行った、4・5・6年の上昇率が大きかった。自分の身近な人からききとり学習を行うことで、社会の課題に関心をもてるようになっている。

3.成果



自他の人権を守ろうとする子どもたちの意識は
取組みを続けることで年度末に向けて向上し、年度ごと
に微増している。取組みを見直し、子どもたちの実態に
合わせた教育実践を進めている成果である。

3.成果



10年前から校区を取り巻く家庭の状況は大きく
変わっていないが、ここ10年で初めて8割の子どもが
自らを肯定的にとらえるという結果。
家庭との連携、教室の心理的安全性の確保、意見表明権の
保障などさまざまな要因によって子どもたちの自己肯定感の
高まりにつながっている。

4. 課題

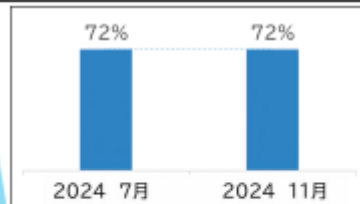
「地域や社会で起こっていることに関心があります」

(生活アンケート3, 4, 5, 6年)

71%〔7月〕→79%〔11月〕(8ポイント上昇)

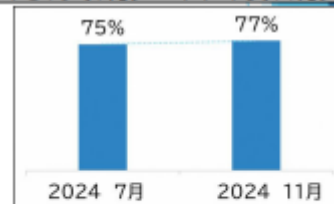
「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあります」(3, 4, 5, 6年)

72%〔7月〕→72%〔11月〕



「将来自分(なかまと協力して)で、社会を変えられると思います」(3, 4, 5, 6年)

75%〔7月〕→77%〔11月〕



どれだけ「自分たちに何ができるか」ということを考えていけるか。今後のとりくみで、「課題が解決できる」という展望をもてるころまで、子どもたちが探究できるよう、ともに進めていきたい。